

Will you give me yourself? will you come
travel with me?

Shall we stick by each other as long as we
live?

ホイットマンの歌う友愛、人類愛の思想は、時
空を超えて永遠に生き続けることと思う。

平成10年

◎2月25日

普賢菩薩女身顕現の事
—性空、法華懺法、遊女—

沼 義 昭

この話は、『古事談』、『撰集抄』、『十訓抄』に
載せられたものであって、短いものではあるが、
法華経信仰の上でも、また後の文芸に与えた影響
の上でも、なかなか興味深い諸要素をふくんでい
ると考えられる。

まず、その概要は、生身の普賢に会いたいと願
う性空上人に夢告があって、室あるいは神崎の遊
女に会いに行けと命ぜられる。そこで上人は、
「目を閉じれば普賢、目を開けば遊女」という奇
瑞を体験する。

この話の中で注目したい諸点というのは、性空
上人という人物と普賢菩薩の関係が、どうい
うものかということ。それは『摩訶止観』に説かれた
四種三昧の中の「半行半坐三昧」、別名法華三昧
とか法華懺法とかよばれるものに基づくこと。そ
れは日本の仏教史の上で、どのような意味をも
っていたのかということ。普賢菩薩が女身を顕現す
る必然性が、普賢関係の經典の中に求めうるかど
うかということ。さらに、この話が作られた頃の
遊女とはどういうものであったか。特に室や神崎
の遊女とはどういう存在であったか。またなぜ遊
女が仏教説話に積極的な意味をもって登場するの

か等々である。

性空上人は、延喜十七年（九一七）誕生、寛弘
四年（一〇〇七）没。天皇の名をあげれば、醍醐、
朱雀、村上、冷泉、円融、花山、一条の時期、藤
原北家の政権確立期であり、晩年は彼の道長とも
重なる。文芸上では紫式部、清少納言、和泉式部
が輩出している。上人は現宮崎県の霧島山、つい
で北九州の背振山にて修行して、法華経八巻を暗
んじたといわれ、姫路の北の書写山円教寺を開い
た。『徒然草』（六九段）にても、法華経読誦の功
によって六根清浄を得た人といわれて、生存中よ
り朝野の尊信を集めていた。

その法華経読誦行は、天台大師の法華懺法の基
本的行法であり、大師自身若き日、この行によっ
て太蘇山にて開悟している。この行法の本尊が普
賢菩薩であり、他の常坐三昧の本尊が釈尊、常行
三昧のそれが阿弥陀如来、非行非坐三昧（一名観
音懺法）のそれが観世音菩薩である。それは法華
経の「普賢菩薩勸発品」と「観普賢菩薩行法経」
に依るものであって、後者は「無量義経」と共に、
開経、結経としていわゆる法華三部経を構成して
いる。

この行法は「観普賢経」に依って、何よりも懺
悔によって六根清浄を得ようとするもので、坐行
（坐禅）をも含むが、特に法華経読誦行が、法華
経に説かれる五種行（受持、読、誦、解説、書写）
中の読誦と相いまって基本となり、つまりは罪障
消滅のための行となる。それは極楽往生の前提と
もなって、罪障消滅の修行そして極楽往生という
二段構えとなり、阿弥陀信仰と結びついて、盛行
を見る。その例は『大日本法華経験記』や諸種の
往生記に見ることができる。

普賢菩薩は、上記の両経において六牙の白象に
乗って顕現する姿が著名であるが、「観普賢経」
を見ると、彼の菩薩は、他数の玉女を伴なってい
ることが印象的であって、神話学的には見逃せな
い点である。玉女は、中国風にいえば仙女、神女

であって、多数の彼女らに囲まれた菩薩という異様な顕現の様相は、普賢の秘められた本性を示す、すなわちシャクティとインドにてよばれる女性性的生命原理を象徴するものであると解しえよう。

この菩薩と水辺の遊女との結合は、偶然とは思われぬし、また物語創作の時代において、一方にては密教的な女性原理への関心、それ故にエロティシズムの権化ともいべき遊女への関心、他方にては、かかる遊女すら往生しうるかという問題意識が混然となったもので、他の説話の中にも多く遊女が登場する時代相を、うかがい見る必要があ

ろう。和泉式部（『拾遺和歌集』や遊女宮木（『後拾遺和歌集』）が、性空に歌を送って教えを請うたという事実、またそれに関心をもった当代人たちの宗教意識を考えたい。

この話は、後に能の『江口』へと変改再編されて、『撰集抄』の西行が主人公となり、江口の遊女妙との問答歌（『新古今和歌集』所収）をふまへて、時雨に出会った西行が宿を貸りた遊女が普賢菩薩の姿を現ずる。長唄の「時雨西行」は、いまも踊りの会にてしばしば上演される。詩に曰く。

漢有游女 不可求思。